

残留日本兵とメディア ——小野田寛郎元少尉の帰還をめぐる

永井 均
広島市立大学広島平和研究所

はじめに

1974年3月12日の夕方4時過ぎ、小野田寛郎元陸軍少尉がフィリピンから帰国した。「先の大戦」が終わっても終戦を信じず、フィリピンで投降を拒み続けた元日本軍人、小野田元少尉がルバング島の密林から投降し、30年ぶりに祖国の土を踏んだのである。

彼が降り立った羽田空港はこの日の午後、世間の話題の中心だった。午後1時過ぎ、東京・那覇間の日本航空（JAL）のジャンボ機が18歳の少年にハイジャックされ（犯人は夜半に那覇空港で逮捕）、4時6分にはノーベル物理学賞の受賞者、江崎玲於奈博士が学会出席のために研究拠点の米国から一時帰国、そして4時30分に小野田元少尉を乗せた日航臨時便が到着したのである。このうち、小野田元少尉への人々の関心はとりわけ高く、羽田空港には彼の帰国を一目見ようと約7000人（空港調べ）が詰めかけた¹。『朝日新聞』は、その時の空港内の様子を次のように報じている。

小野田さんらを乗せた日航臨時便のDC8（金垣祐介機長）は、晴れあがった同空港に予定通り到着、すぐそばに貴賓室のある二十番スポットに入った。同空港には親族、戦友、学友らのほか、一般の人も多数出迎え、小野田さんが元気な姿を見せるとどよめきがわき起こった²。

小野田元少尉がルバング島のジャングルから生還したニュースは、文字通り日本社会を席卷し、テレビの主要各局は午後4時頃から一斉に特別番組を放送した³。その反響の大きさは、例えばNHKの特番が45.4%という驚異的な高視聴率を記録し⁴、『週刊文春』が「小野田ショック」と特集記事に見出しを付けたことから窺える⁵。日本ばかりか、諸外国もフィリピンの残留日本兵⁶のニュースを大きく報じた⁷。

それでは、小野田元少尉の帰還は当時、日本社会で具体的にどのように受け止められたのか。本稿では、帰国前後の新聞報道を手がかりに⁸、元少尉の帰還の語られ方に着目し、その内実を探っていく⁹。初めに小野田元少尉が1944年12月にフィリピンに渡り、ルバング島に派遣され、終戦後30年近くその小島の密林に身を潜めた後、74年3月に帰国するまでのプロセスをたどる。次いで、元少尉をめぐる国内報道について、特に帰国前後に焦点を当てて分析する。具体的には、ま

ず主要紙である『朝日新聞』と『読売新聞』、『毎日新聞』の三紙の報道状況を考察し、続いて『サンケイ新聞』が元少尉の帰国直後に実施した1000人に対するアンケート調査の内容を吟味する。さらに地方紙の報道例として『中国新聞』を取り上げ、投書を中心に読み解く。以上のテキスト分析を踏まえ、小野田元少尉の帰還をめぐる新聞報道の論調とその意味を考えることとしたい。

1. 小野田元少尉の帰国まで

(1) ルバング島での日々

22歳だった小野田寛郎（当時は陸軍曹長）がルバング島に渡ったのは1944年12月31日の未明のことであった¹⁰。これより先、彼は同年8月に予備士官学校を卒業し、翌9月に陸軍中野学校二俣分校（陸軍二俣幹部教育隊）に入学した。二俣分校は戦争末期の1944年9月に創設され、秘密戦や遊撃戦（ゲリラ戦）を専門にする幹部要員を短期養成した教育機関で、小野田はその第一期生だった¹¹。彼は約3カ月の教育期間を経て11月末に二俣分校を卒業し、第14方面軍司令部情報部附としてフィリピン行きを命じられる。マニラに着くと、小野田は情報部別班の班長である谷口義美陸軍少佐から、第8師団（杉兵団）への配属を告げられた。第8師団長は横山静雄陸軍中將であり、軍の指揮命令系統からすれば、小野田の直接上官は横山中將ということになる¹²。

ルバング島に派遣された小野田に課せられた任務は、「ルバング島において対海空の監視と敵情の報告、ならびに敵の上陸後における飛行場使用妨害（遊撃戦）」であった¹³。小野田はティリック港に上陸、配属先の臨時第2中隊の早川小隊に合流し、遊撃戦の指導に当たる。1945年1月10日に現役満期除隊となるも、翌日付で陸軍少尉に昇進し、引き続き臨時召集されてルバング島に留まった。彼にとって不運だったのは、赴任直後の2月28日に米軍がルバング島に上陸し、直ちに島全体を占領、その過程で現地の日本軍将兵が戦死し、ジャングルへの撤退を余儀なくされたことだ。

その後、1945年9月3日、第14方面軍司令官の山下奉文大將がルソン島のバギオで降伏文書に署名し、米軍に降伏する（前日には、東京湾に停泊中の戦艦ミズーリの甲板上において、日本と連合国の間で降伏文書署名式が行われた）。ここに、フィリピンの日本軍は正式に降伏し、終戦が訪れた。しかし、かかる大日本帝国の運命の岐路にあっても、ルバング島の密林には、降伏に背を向ける日本兵が潜んでいた。

終戦とともに、米軍はルバング島の日本兵に対して投降勧告を試みた。当時、55名の日本兵が降伏せず、ジャングルに身を潜めていた。1945年8月から9月にかけて9名が投降し、米軍の捜索隊に日本の投降兵も加わって投降勧告をした結

果、翌46年3月に39名が投降した。その一方で、3月22日に3名の日本兵が米軍との交戦で命を落とした¹⁴。

終戦から1946年3月までに48名が投降し、ルバング島に残された日本兵は小野田元少尉と島田庄一元伍長、小塚金七元一等兵、そして赤津勇一元一等兵の4名だけとなった。彼らはグループで行動していたが、1949年9月頃、赤津元一等兵が離脱して姿を消し、その後、翌50年7月頃にフィリピン当局に投降した。赤津元一等兵は1951年3月28日に日本に帰国。赤津の証言でルバング島になお3名の残留兵が生存していることが判明し、1952年初旬、日本の元軍人や現地で服役中の戦犯受刑者、新聞記者などが島に渡って投降勧告を行った。しかし、彼ら残留兵の生存を確認することはできなかった¹⁵。

1954年5月7日のことである。ルバング島の残留兵3名は、島南部のゴンティンで訓練中のフィリピン軍特殊連隊（スカウト・レンジャー）と遭遇し、銃撃戦となった。その結果、島田元伍長が射殺され、小野田元少尉と小塚元一等兵は難を逃れて現場から立ち去った。この事件はすぐにマニラの日本大使館に通報され、ほどなく死亡者が島田元伍長であることが確認された。日本政府は小野田、小塚両名の家族と厚生省事務官の3名を「説得隊」としてルバング島に派遣し、1954年5月から6月にかけて約3週間の搜索を試みたが、彼らを探し出すことはできなかった¹⁶。

その後もルバング島では、残留兵によるとみられる人畜殺傷等の事件が散発した。1959年1月末には農民が銃撃に遭い、所有するカラバオ（水牛）も射殺、2月初めには建設作業員が殺害された。島民の訴えを受けて、フィリピン国家警察軍（PC）が武力による残留兵の討伐作戦に乗り出すとのニュースが報じられると¹⁷、日本政府は事態を憂慮し、PCに討伐の中止を要請するとともに、2月中に大使館員を現地に派遣して搜索に当たらせた。

1959年5月から、日本政府派遣団による本格的な搜索活動が開始される。10月下旬には小野田、小塚両家の家族も搜索隊に加わり、フィリピン側の協力も得ながら搜索を続けた¹⁸。搜索活動は5月から12月にかけて三つの時期に分けて合計200日余り、計14名によって実施されたが、この時も小野田、小塚両名を発見できなかった。元少尉らは密林各所に撒かれたビラの記載の誤りなどに疑念を抱き、「謀略にかからぬよう」用心して姿を現わさなかったのである¹⁹。

かくして、1959年12月2日、日本政府派遣団は2名が死亡したと判定し、搜索終了を決定する。搜索を所管する厚生省は、両名が、島田元伍長が射殺された日の翌日、1954年5月8日に死亡したと認定し、それぞれの家族に死亡公報を通知、両家で葬儀も営まれた²⁰。他方、島民たちは両兵士の死亡をにわかに信じ得ず、フィリピン当局も2名が死亡した証拠がないとの見地から、その後も独自に搜索を続けた。だが、結局発見に至らず、1960年2月10日をもって搜索の打ち切りを

宣言し、両名の死亡を認定した²¹。かくして以後、公式にはルバング島に残留日本兵は存在しない、ということになった。

(2) 投降と恩赦、そして帰国

ところが、1960年以降も、ルバング島民は残留日本兵とみられる者によって攻撃を受けた。小野田元少尉らにとっては、戦争は依然として続いており、島民が開墾などで生活範囲を広げていくと、それを自分たちの「領土」の侵害と捉えた。元少尉によれば、ジャングルに身を潜めて生きていくために、姿を見られた時は「その人を殺した」。あくまでも「自己防衛のためだった²²」。元少尉らの攻撃によって死傷し、家を焼かれ、生活手段を奪われた島民は少なくなかった。フィリピン当局の発表（1972年10月）によれば、残留日本兵の攻撃で30名が殺害され、100名が負傷したという²³。残留兵と島民との間に友好的な交流はなく、両者は敵対関係にあった²⁴。ルバング島民にとって、小野田ら残留兵の存在は恐怖の的だった。

1972年10月19日、木曜日の朝のことである。小野田元少尉と小塚元一等兵は食糧補給のためにティリックからほど近い陸稲畑のある丘に足音を忍ばせた。稲刈りの作業をしていた農民に威嚇射撃をすると、農民たちは驚いて逃げ出した。その後、自らの存在感を誇示するため、2人は農民が取り込み作業をしていた籾に藁をかぶせて放火した。彼らがよく雨期明けに決行していた「狼煙作戦」だ。農民から通報を受けたPCは、2人の予想より早く現場に到着し、小野田、小塚両兵士との間で銃撃戦となる。その過程で小塚元一等兵が撃たれた。小塚元一等兵は「胸をやられた。もうだめだ」と血を吹いて倒れ、小野田元少尉はからくも逃走した²⁵。小塚はその後、家族によって死亡が確認された²⁶。

この情報はすぐにマニラの日本大使館に通報された。日本大使館はフィリピン当局、および東京の外務本省と連携を図りながら、生存しているとみられる小野田元少尉の搜索態勢を整えた。フィリピン側も、大統領府の指示でペドロ・ワッチョン（Pedro D. Juachon）空軍中佐を中心に特別任務班「タスクフォース・オノダ」を編成し、小野田元少尉の身柄の安全確保を期して搜索に乗り出した²⁷。フェルディナンド・マルコス（Ferdinand E. Marcos）大統領は10月下旬、元少尉が「無事救出された場合には直ちに日本政府に身がら^[ママ]を引き渡す」ことを部下に指示し、大統領の意向はすぐに日本大使館に伝達された²⁸。

小塚元一等兵の射殺事件は、小野田元少尉の生存の可能性が高い、とのニュースとともに、日本で大きく報じられた²⁹。現地のルバング島では、ルバング町のラウル・ピロラ（Raul T. Virola）町長や現地駐留フィリピン空軍（第582航空警戒管制中隊）の中隊長ジョセフ・アサンサ（Joseph M. Asanza）少佐ら関係者から、残留日本兵によって島民が30名以上殺された旨が語られ、その情報は日本でも報じられた³⁰。他方、小塚元一等兵の死後、日本では小野田元少尉の「救出」を求

める日本の世論が急速に高まり³¹、その搜索があたかも「国家的使命」であるような様相を見せた³²。

フィリピン側も、小野田の搜索を大統領府主導による国家的な施策と位置づけた。ルバング島で搜索を指揮するワッチョン空軍中佐（大統領府の官房長官補佐官でもあった）は、アレハンドロ・メルチョール（Alejandro Melchor, Jr.）官房長官から「オノダの身柄を生きのまま確保せよ」とのミッションを受け、現地に急派された³³。現場に赴いたワッチョン中佐は、被害島民の怒りを知り、その復讐心を抑える必要を感じた。そこで、赴任早々、島民を集めて搜索の目的を説明し、理解と協力を求めた。1972年10月24日にルバング町、翌25日にロオック町で町民集会を開いて、町民たちに搜索の意図を説いた（小野田元少尉の弟滋郎と義姉保江も同席した）。その席上、ワッチョン中佐はマルコス大統領の意向を町民に伝え、搜索への協力を強く要請した³⁴。

こうして1972年10月下旬から73年4月中旬まで、日比合同の三度にわたる約6カ月間に及ぶ搜索が展開される。まず1972年10月下旬から第一次搜索が開始され、11月下旬まで実施された。だが、元少尉を発見できないまま、第一次派遣団は11月末に帰国。11月下旬から第二次搜索が着手され、翌1973年2月初旬まで続けられた。さらに同年2月初旬に少人数による第三次搜索が始まるも、結局、元少尉に関する手がかりを得られず、小野田家の意向も踏まえて、搜索は4月に打ち切られた。日本政府が6カ月間の搜索に投じた国費は9021万円にも達していた³⁵。

三度にわたる大規模な搜索活動の中で、日本政府は元少尉の家族を含む100名以上の人員を現地に派遣した³⁶。むろん元少尉自身は一連の搜索を察知し、現地で呼びかける実兄格郎の声も本人だと確信できた。だが、「この搜索には裏がある」と疑い、「まだ戦争は終わっていない」との考えを払拭できなかった。さらに、日本の搜索隊員に銃を所持したフィリピン兵士が付き添っていたこともあり、警戒心を緩めることもできなかった³⁷。小野田元少尉には、軍人として命を受けてこの島に派遣されてきたのだから、上官の命令がない限り絶対に投降できないという信念があり、また小塚元一等兵が殺されたことに対する激しい怒りや搜索への不信感とも相俟って、その心はかたくなになった³⁸。

1973年4月に日本政府派遣団が帰国すると、島は再び静けさを取り戻す。小塚元一等兵を失ったことで、小野田元少尉はルバング島で初めて一人で生きていくことになった³⁹。「戦力が半分になった」わけで、「一人だとなると、相手側は少人数での待ち伏せ狙撃が可能になり、それが一番怖かった⁴⁰」。元少尉は、日比両国の関係者による搜索を観察し、搜索隊が残した新聞等を熟読し、小塚元一等兵の遺体がフィリピン側によって丁重に扱われ、また「日比親善」や「日比友好」の雰囲気を感じ、「謀略宣伝」との疑念を抱きつつも、もしかすると戦争は終わったのかもしれない、と考えるようになった⁴¹。

一人残され、心に迷いが生じ始めた頃、小野田元少尉は島の東部プロール付近、通称「ワカヤマ・ポイント」で野営していた青年冒険家・鈴木紀夫の姿を発見する。1974年2月16日のことである。

鈴木青年は元少尉を探そうと2月9日にルバング島に渡り、16日からアッガワヤン川上流のワカヤマ・ポイントで野営を始めていた。小野田元少尉は初日から鈴木青年の動きを注視した。フィリピン空軍の兵士かもしれず、また近くに仲間が潜んでいるかもしれない。元少尉はそう考え、青年のキャンプの周辺に数日潜伏するなど、その動向を注意深く観察し続けた。そして2月20日の日没前、元少尉はついに鈴木青年に接近する。その素性を見定めるべく、いわば情報収集の一環として、銃を構えたまま近づいたのである。場合によっては射殺も辞さないつもりだった⁴²。

在フィリピン日本国大使館のト部敏男大使が元少尉本人から聞いたところでは、鈴木青年の前に姿を現わした時、元少尉は次のような心境だったという。

日本人が1人で野宿していても現地人が黙って見ているものなら、戦争は終わったのは9分9厘確実だと思い、そしてまた、あとの1厘は、これは自分が賭けて出ねばならない、もしこの賭けに失敗したときは、自分の不明のいたすところと諦めるほかない⁴³。

「おい」。突然目の前に小野田元少尉が姿を現わしたことに鈴木青年は驚愕する。銃を構える元少尉を前に、自分は日本人だと必死に訴えた。殺されるかもしれない、と思った⁴⁴。鈴木青年はしかし、持ち前の度胸と快活さで元少尉と会話を続け、少しずつ打ち解けていく。恐らく、相性もよかったのだろう。

「小野田さん、写真を撮らせてください」。鈴木青年の求めに元少尉は意外にも「ああ、いいよ」と応じ、撮影を許した⁴⁵。元少尉はまた、上官による作戦任務の解除命令を条件に投降の意向を示唆した。翌2月21日の朝、鈴木青年が元少尉に対して「上官の命令があれば降りてきてくれますね」と別れの言葉をかけると、元少尉は「いつでも出てやる」と応じた⁴⁶。その後、青年から小野田元少尉と遭遇したとの通報を受け、フィリピン空軍は日本大使館にこのニュースを内報する。同時に空軍当局は日本大使館に対し、元少尉の「救出作戦を成功に導くためルバング島への渡航はこれを禁止する方針」、およびルバング島への民間機の飛行を禁じたことを伝えた⁴⁷。さらに、搜索の統括責任者である空軍のトップ、ホセ・ランカード（Jose L. Rancudo）司令官は、報道陣がルバング島に渡ることを禁じる旨を語った⁴⁸（そのため、日本のメディアは現地での取材ができなかった）。小野田「発見」の報を受け、日本政府は「元上官」の谷口元少佐（および、それまで数度搜索を指揮した日本政府派遣団の柏井秋久団長）らをフィリピンに急派した。

谷口元少佐と鈴木青年は3月4日にルバング島に渡り、翌5日の朝、「ワカヤマ・ポイント」でテントを張り、野営しながら元少尉が姿を見せる時を待った。

3月9日の夕方、元少尉は山中に配された鈴木青年のメッセージと谷口元少佐による命令書を確認した上で、テントに近づき、ついに2名の前に姿を現わす。かくして、小野田元少尉は谷口元少佐による任務解除命令の口達を受けて投降した。3名は翌10日の早朝まで語り明かした。

1974年3月10日、月曜日の正午前、鈴木青年が日本大使館関係者に小野田元少尉との接触成功を通報。これを受けて、元少尉の実兄の敏郎医師と柏井団長が「ワカヤマ・ポイント」に赴き、テントにいた3名と合流して感動の対面を果たした。

10日の午後3時過ぎ、小野田元少尉や鈴木青年、谷口元少佐らは島内の空軍のレーダー基地に向けて移動を始めた。まずブロールまで徒歩で下山するのだが、元少尉の両側にフィリピン空軍の将校、ペドロ・ロスバニョス (Pedro L. Los Baños) 大佐とフンベルト・カパワン (Humberto Kapawan) 少佐が付き添った。小野田元少尉に憎悪を抱く住民からの襲撃を予防し、牽制するためだったという⁴⁹。途中、元少尉の希望でレーダー基地の東側2kmにある通称「へび山」に立ち寄り、隠してあった軍刀や小銃、その他の遺留品を回収した。谷口元少佐や鈴木青年、カパワン空軍少佐も同行した。そのため、彼らがレーダー基地に到着したのは夜の9時過ぎとなった。他方、小野田投降の報を受けて、ランクード空軍司令官やト部大使らはマニラからヘリコプターでルバング島に急行した。ルバング渡航規制のためにマニラで足止めを食っていた日本人記者団も現地に飛んだ⁵⁰。

10日の午後9時25分、小野田元少尉はレーダー基地に到着すると、フィリピン兵が整列する「投降式場」に歩を進める。彼はそのまま儀仗兵の前に立つランクード空軍司令官の前に向かい、日本軍人の象徴の軍刀を渡して敬礼する。ランクード司令官はいったん軍刀を受け取り、元少尉の「敢闘を軍人の亀鑑であると賞讃」、「比国軍総司令官であるマルコス大統領の名においてこの軍刀をお返しする」と述べて軍刀を元少尉に返却し、こうして「投降の儀式」は終わった⁵¹。レーダー基地では投降セレモニーの後、直ちに記者会見が開かれ、元少尉の口から初めて自身の考えや思いが語られた。その様子は日比両国のメディアによって一斉に報じられた⁵²。

翌3月11日の朝9時30分、小野田元少尉はフィリピン空軍のヘリコプターでルバング島からマニラに移送され、午前11時頃にマラカニアン宮殿（大統領府）でマルコス大統領と面会する。元少尉は大統領の前に進み出て軍刀を差し出した。大統領はいったん軍刀を受け取り、その後、（ランクード司令官と同様に）軍刀を元少尉に返した。大統領は元少尉に対し、「天皇と国家のために戦った日本軍人の至高の象徴だ」、勇敢な兵士の鑑だと述べて、彼を褒め称えた。その上で、元少尉が戦中・戦後に犯した違法行為について恩赦を与え、無条件で日本への帰国を許した⁵³。こうして、1974年3月12日、火曜日の現地時間午前11時58分（日本時間午後零時58分）、小野田元少尉を乗せた日航特別機はマニラ国際空港を発ち、羽田

空港に向けて飛び立った⁵⁴。元少尉、51歳の時であった。

2. 「小野田帰還」の新聞報道

(1) 主要紙の論調

日本国民は小野田元少尉の帰還をどう受け止めたのだろうか。横井庄一元軍曹がグアム島で痛々しい姿で投降、帰国し（1972年2月）、またルバング島で小塚元一等兵元少尉が射殺された（72年10月）例とは対照的に、小野田元少尉は投降時、戦闘服に身を包んで直立不動のまま敬礼するなど、かつての日本帝国軍人そのままの風貌で姿を現わした。周知のように、小野田元少尉はその後、日本に帰還するのだが、一連の事態を現地取材した時事通信の沼館義明記者は、その帰国が「すべての日本人に強烈かつ異様な衝撃を与えた」と書き記している。日本人のかかる反応について同記者は、「めまぐるしく変転してきた戦後の“物理的時間”に、まさに対極的に対置して現出された小野田さん独自のゆるぎない“主体的時間”への驚異」と捉えた⁵⁵。小野田元少尉は（小塚元一等兵と異なり）情報将校という高い階級にあり、また眼光鋭く戦闘服姿という日本軍人のイメージさながらの姿で突如出現した。彼の階級と劇的な登場の仕方が日本国民に強いショックを与え、彼らの関心を誘ったのであろう⁵⁶。

さて、日本国民の驚きと関心に応えるべく、メディアは総力を挙げて小野田関連のニュースを速報した。前述のように、テレビの主要各局は特別番組を編成して小野田元少尉の帰国を伝え、また『週刊読売』が宮城音弥教授など識者の談話記事『「小野田帰還」を冷静にみる』を掲げたように⁵⁷、週刊誌も相次いで緊急特集号を組んだ⁵⁸。東京や地方のデパートなどでは、新聞社主催の「小野田さん救出速報写真展」といった特別展が催された⁵⁹。まさに、「小野田さんが出てきて、国民が熱に浮かれているような状況⁶⁰」であった。

もちろん、新聞各紙も競うように一連の出来事を事細かく報じた⁶¹。小野田元少尉の投降を伝える東京の主要紙の3月11日付朝刊のほとんどが小野田関連記事を一面トップに掲げた。以下では、全国的に発行部数が多い主要三紙、『朝日新聞』と『読売新聞』、そして『毎日新聞』を取り上げ（いずれも東京本社版）、その報道ぶりを分析したい。ちなみに、当時の月間発行部数の平均は、『朝日新聞』が約1078万部と一番多く、次いで『読売新聞』の約1022万部、そして『毎日新聞』の約780万部と続いた⁶²。

これら三紙の小野田元少尉の関連記事の掲載面数、および全面数に占める割合は表1の通りである。

表1 小野田元少尉帰還をめぐる報道状況

日付	朝夕	新聞名	総面数	小野田関連面数	日付	朝夕	新聞名	総面数	小野田関連面数
3月11日	朝刊	朝日	20	7 (35%)	3月14日	朝刊	朝日	32	2 (6%)
		読売	26	6 (23%)			読売	20	3 (15%)
		毎日	20	7 (35%)			毎日	20	2 (10%)
3月11日	夕刊	朝日	12	5 (42%)	3月14日	夕刊	朝日	12	3 (25%)
		読売	12	7 (58%)			読売	12	1 (8%)
		毎日	10	7 (70%)			毎日	10	2 (20%)
3月12日	朝刊	朝日	26	6 (23%)	3月15日	朝刊	朝日	20	2 (10%)
		読売	20	4 (20%)			読売	20	1 (5%)
		毎日	20	6 (30%)			毎日	20	2 (10%)
3月12日	夕刊	朝日	12	3 (25%)	3月15日	夕刊	朝日	12	1 (25%)
		読売	12	3 (25%)			読売	12	1 (8%)
		毎日	8	5 (63%)			毎日	10	2 (20%)
3月13日	朝刊	朝日	20	7 (35%)	3月16日	朝刊	朝日	20	2 (10%)
		読売	24	8 (33%)			読売	20	2 (10%)
		毎日	20	5 (25%)			毎日	20	2 (10%)
3月13日	夕刊	朝日	12	3 (25%)	3月16日	夕刊	朝日	12	1 (8%)
		読売	12	2 (17%)			読売	12	2 (17%)
		毎日	8	3 (38%)			毎日	10	1 (10%)

(注) いずれも1974年3月、東京本社版。表中の「小野田関連」欄のパーセント(%)は、総頁に占める小野田元少尉関連記事を掲載した面(頁)の割合を示す(小数点以下は四捨五入)。

(出典) 国立国会図書館所蔵の各紙縮刷版より筆者作成。

この表からは、新聞メディアの小野田元少尉に対する高い関心度が改めて確認できる。加えて、帰国前後の時期(3月11日~13日)に報道のピークを迎えていたことも見て取れる。

帰国前後の当該3日間における三紙の関連記事の見出しを整理したのが表2~4である。

表2 小野田帰還記事の見出し(朝日新聞)

日付	朝夕刊	面	見出し
3月11日	朝	1	小野田さんあす帰国—ルバング島で30年ぶり救出
	朝	1	命令なく…残留—つらかった戦友の死 [ルバング島での記者会見]
	朝	1	心身ともに健康—所持品、ほとんど携行

	朝	1	両親は羽田で対面—国立東京第一病院 準備体制整う
	朝	1	大統領へ謝電—田中首相
	朝	1	日航、臨時便を準備—政府が要請
	朝	2	称賛の裏 英雄扱い警戒—比国の反響
	朝	2	旧軍思わず経済進出一島民は不安消え安心感
	朝	2	比国空軍 救出に積極協力
	朝	2	元日本兵、なお残存も—ミンダナオなど可能性
	朝	2	恩給は年17万余円—厚生省試算
	朝	3	小野田さん “一人の戦争” に幕
	朝	3	8日夕方山下山決意—へび山の連絡箱 命令の写しを確認
	朝	3	将校の責任も消滅—下山を決意した胸のうち
	朝	3	折り目正しく応答〔小野田元少尉の証言〕
	朝	3	軍刀をささげ司令官に敬礼
	朝	3	「もうとがめない」—ひと目でもと島民たち
	朝	3	「成功」にわき立つ—マニラ大使館
	朝	3	思わず握手—援護局
	朝	3	鈴木さんと比当局に感謝—厚相が談話
	朝	4	機熟し静かな救出—小野田さん捜索活動を追って〔現地記者座談会〕
	朝	18	戦争ただむなしく—各世代それぞれに感慨
	朝	18	生き抜く姿に庶民の心〔横井元軍曹と小野田元少尉の比較〕
	朝	18	ムダな半生 悔やむことに—横井さん「30年」に複雑な思い
	朝	19	陰膳30年、今終わる—小野田さん救出、喜びの両親
	朝	19	合掌、涙とめどなく—「小塚さんも一緒なら」
	朝	19	衆生の恩ひしひしと—父・種次郎さんが手記
	朝	19	自決の刀を渡した子が…—母タマエさん
	朝	19	小塚さん宅から祝電
	朝	19	戸を閉めた小塚さん宅—「そっとしておいて」
	朝	19	見知らぬ人からお礼の電話—発見者、鈴木さん宅
	朝	19	「歓迎、静かに」—中野学校関係者
3月11日	夕	1	小野田さん、比国大統領と会う
	夕	1	「日比友好に尽くす」—迷惑かけて…とわびる
	夕	1	「比国協りに心から感謝」—天皇陛下おことば

	夕	1	対比新経済協力も一政府“閣僚使節”も検討
	夕	1	帰国は明夕四時半—ルバンク去りマニラ着
	夕	1	帰国考えはじめたのは昨年三月ごろ—谷口さんに語る
	夕	2	“孤独の苦闘”30年—小野田さん会見詳報
	夕	2	小野田さんをどう迎える—識者座談会
	夕	2	各国にも大きな反響
	夕	10	小野田さん 岩の斜面で眠った30年—洞くつへの避難はせず
	夕	10	村民の拍手に戸惑いの表情—小野田さん
	夕	10	老父母には最高の朝—ポツリ「教育はこわい」
	夕	10	僕はメシたき役—ロマン実って本望です〔鈴木青年の言葉〕
	夕	10	責任果たしホッと—谷口さんの留守宅
	夕	10	海南省で戸籍復活
	夕	10	速報写真に人だかり—有楽町
	夕	11	第二の人生へ一歩—小野田さん
	夕	11	戦友（小塚さん）におえつの別れ
	夕	11	兄弟再会、涙なく…—茶がゆに「うまいなあ」
3月12日	朝	1	小野田さん今夕帰国
	朝	1	日本料理で夕食会〔日本大使公邸〕
	朝	1	厚生次官マニラ着
	朝	2	小野田さん 底抜けに明るい歓迎〔比空軍による歓迎昼食会〕
	朝	3	徹夜で12時間の“報告”〔小野田元少尉による谷口元少佐への報告〕
	朝	3	肩の荷おろした救出コンビ—鈴木さん谷口さん
	朝	5	三十年と四時間〔社説〕
	朝	18	「救出作戦」にズレ—「命令」なく30年空費
	朝	18	戦争は二度とごめん〔朝日新聞社に寄せられた声〕
	朝	19	連載「小野田陸軍少尉—凍結された30年」〔第1回〕
	朝	19	横井さんと同じ部屋—小野田さんの入院待つ〔国立東京第一病院〕
	朝	19	「おめでとう」に包まれ—両親が出迎えに上京
3月12日	夕	1	小野田さん、帰国の途—別れの墓参
	夕	3	忠誠心とさごところ—小野田さん帰国に思う〔安岡章太郎〕
	夕	11	対面目前に心せく—小野田さんの両親
3月13日	朝	1	小野田さん元気に帰る

	朝	1	両親と感激の対面—「命令遂行だけ考えた」
	朝	1	体調に異常なし—病院で診察
	朝	2	戦友の死わびて—その時だけ泣き声 小野田さん
	朝	2	「寛郎、よくぞ生きて…」 目と目でうなずくだけ—両親と対面
	朝	2	「物資は豊富だな」
	朝	3	「英雄なんて…ただ任務」—小野田さん記者会見
	朝	3	この厳しさに思う—「記者会見」で識者
	朝	18	連載「小野田陸軍少尉—凍結された30年」[第2回]
	朝	19	割り込んだ政治家—両親の前に人がき
3月13日	夕	1	「公害は少ないネ」—小野田さん、さわやか東京の朝
	夕	10	旧日本軍で観光商売—ルバング開発計画
	夕	11	おはよう日本晴れ—小野田さん
	夕	11	「長生きして下さいよ」—首相、訪問の父親にいたわり
	夕	11	鈴木さんに感謝状〔斉藤邦吉厚相〕

(注) 本表は、原則として主見出し(およびカット見出し)を抽出したが、肩見出しや袖見出しを補った場合がある。なお、「天声人語」や「素粒子」などのコラム欄、写真・年表のキャプション、投書欄、テレビ・ラジオ欄、および広告欄は除外した。見出し欄の亀甲括弧〔 〕は筆者による補足である。

(出典)『朝日新聞』東京本社版、1974年3月分(国立国会図書館所蔵縮刷版)より筆者作成。

表3 小野田帰還記事の見出し(読売新聞)

日付	朝夕刊	面	見出し
3月11日	朝	1	小野田さん元気で救出—30年ぶりあす帰国へ
	朝	1	ルバング島、元上官ら説得11時間—戦友(小塚島田)失い残念
	朝	1	比空軍司令官らの前—軍刀ささげ、一礼
	朝	1	国立病院でまず静養
	朝	1	実兄とも対面—“迷惑かけ申し訳ない”
	朝	1	比大統領をきょう訪問—小塚さん墓碑にもお参り
	朝	1	軍刀と小銃二丁持つ
	朝	1	国立病院でまず静養—受け入れチームつくる
	朝	2	世界に驚きと称賛—“サムライ”の伝統か
	朝	2	小野田さん、恩給17万7千円一支給さる
	朝	2	軍刀持ち帰国希望—比政府が声明

	朝	2	国は冷たかった—複雑な心境、戦没遺族
	朝	2	未帰還なお四百人
	朝	3	耐えたジャングルの孤独
	朝	3	すさまじい生命力—だが軍人精神礼賛は危険〔菊村到〕
	朝	3	信念を貫いて—新鮮な目で日本の姿を〔識者談話〕
	朝	3	そっと迎えたい—気持ちを十分理解して〔戦友談話〕
	朝	7	小野田さんの無事救出に思う〔社説〕
	朝	18	30年の“空白”は重く…
	朝	18	踏みとどまらせた「死ぬな」のひと言
	朝	18	リッパ かわいそう 密林の方がマシ?—ヤングの反応
	朝	19	いま終わった“長い戦争”
	朝	19	“将校の礼”くずさず—服装整然、余裕の笑顔さえ
	朝	19	歓喜の両親へ祝い太鼓—「偉かった」と真っ先に
	朝	19	“これで安眠”と現地島民
	朝	19	全国の皆様ありがとうございます〔小野田種次郎手記〕
	朝	19	家庭を早く—横井さん
	朝	19	金七の話を一小塚さん宅
	朝	19	責任果たしてくれた—谷口さん宅
	朝	19	冒険男宅も大騒ぎ
	朝	19	もう縁談が二つも
	朝	19	さっそく戸籍復活へ
3月11日	夕	1	小野田さん、比大統領と会見
	夕	1	“戦友の墓”に別れ—あす夕四時半に羽田へ
	夕	1	ラジオで情報集め—小野田さんの生活
	夕	1	判断誤った私に対し 温かい歓迎感謝
	夕	1	近く具体的謝意—官房長官語る
	夕	1	まず戸沢次官派遣
	夕	1	日航特別機に赤飯など用意—乗員に郷里出身者
	夕	2	実った日比連携作戦
	夕	2	心の動き巧みに掌握—大義名分待っていた 小野田さん
	夕	2	他に日本兵形跡ない 孤独なんて弱気は…〔小野田元少尉記者会見〕
	夕	2	和歌山県知事マニラへ

	夕	2	海南市の“名誉市民”に
	夕	2	小野田さん戸籍復活
	夕	4	小野田さん生還 英紙、一斉に報道
	夕	4	米ではほとんど関心なし
	夕	9	生き残り兵の物語—横井さんより早かった企画
	夕	10	「命令」が縛った密林30年—絶対服従の悲劇〔識者談話〕
	夕	10	墓に合掌する老父—「慎重に第二の人生を…」
	夕	10	両親、今夜東京に
	夕	11	“終戦の夜”誕生パーティー〔比空軍による歓迎会〕
	夕	11	人間復活 ワインで乾杯—“52歳” やっと笑顔
	夕	11	両親が待ってる！—こみあげる望郷
	夕	11	「兄さん、意外に若いな」—“空白”一瞬に埋めた再会
	夕	11	谷口元少佐へ徹夜で任務報告
3月12日	朝	1	小野田さん今夕帰国—背広姿でお別れパーティー
	朝	3	ルバンクへ経済協力—政府方針
	朝	3	戸沢次官マニラ入り
	朝	3	自民が救出歓迎談話
	朝	3	旧軍法による処罰者 救済策検討する—首相答弁
	朝	18	鈴木青年の人間像—プロもギャフン “搜索野郎”
	朝	18	山下将軍の降伏命令書持つ
	朝	19	日本の味に舌つづみ—小野田さん “市民第一夜”
	朝	19	前夜もうバンザイ—両親着いた東京駅で
	朝	19	故郷コースで復員—乗務員も後輩たち
	朝	19	明るい休養室も用意されて—横井さんと同室〔国立東京第一病院〕
3月12日	夕	1	小野田さん故国へ—日比米戦士の墓に参拝
	夕	10	孤独な密林30年—社会復帰は早い
	夕	10	小野田さんを観桜会に招待
	夕	11	小野田さん 日本晴れの復員
	夕	11	「小塚さんにすまぬ」—この朝、むせびなく両親
	夕	11	和解の指輪で市民に手振る—出発前の小野田さん
	夕	11	入院長くて10日？—病院
	夕	11	小塚さんの弟夫婦が出迎え

	夕	11	“歓迎の羽田” 騒然—沖縄の空から衝撃の急報
3月13日	朝	1	小野田さん故国に帰る—出迎えの父母と対面
	朝	1	“立役者” 鈴木さんも
	朝	1	全く異常なし—診断結果
	朝	2	未帰還者の捜索に全力—厚相答弁
	朝	4	任務の30年幸せだった—小野田さん帰国記者会見
	朝	4	怒りと悲しみ一気に—「小塚さん」に言葉とぎれる
	朝	4	文明は危険な感じ—機内の小野田さん
	朝	4	ルバングを観光地に—比政府が計画
	朝	5	小野田さん救出報道—モスクワ放送
	朝	18	感激に水をさした名刺族—息子はまだか 両親、首を長く
	朝	18	片や「顔見るだけで満足」の人
	朝	19	水入らずの祖国の第一夜—「寛郎、よう生きて帰った」
	朝	19	両親らも病院に一泊
3月13日	夕	11	すっきり“祖国の朝” 小野田さん
	夕	11	首相、お父さんを祝福
	夕	11	健康だが多弁で疲労気味
	夕	11	鈴木さんに感謝状—厚相

(注) 本表は、原則として主見出し（およびカット見出し）を抽出したが、肩見出しや袖見出しを補った場合がある。なお、「編集手帳」や「よみうり寸評」などのコラム欄、写真・年表のキャプション、投書欄、テレビ・ラジオ欄、および広告欄は除外した。見出し欄の亀甲括弧〔 〕は筆者による補足である。

(出典)『読売新聞』東京本社版、1974年3月分（国立国会図書館所蔵縮刷版）より筆者作成。

表4 小野田帰還記事の見出し（毎日新聞）

日付	朝夕刊	面	見出し
3月11日	朝	1	小野田さんあす帰国へ
	朝	1	ルバング島 30年ぶり救出—“投降命令” 受入れ
	朝	1	比軍司令官に軍刀—ささげ銃に迎えられて
	朝	1	言葉少なく、落ち着いて—記者会見
	朝	2	救出まで
	朝	2	声つまらず戦友
	朝	2	日航機で引取り—小野田さん受入れ態勢整う

	朝	2	帰国を温く迎えてあげたい—田中首相語る
	朝	2	首相らフィリピン政府に感謝電
	朝	2	“奇跡”なお待つ人びと—「未確認死亡」は二万人
	朝	3	耐えぬいた密林の30年
	朝	3	各世代はこう受け止める
	朝	3	「くよくよしなかった」だけ—質実剛健の“しつけ”生きる
	朝	3	小野田さんの孤独な戦い〔加賀乙彦〕
	朝	4	“サムライ帰還”に驚く世界—小野田さん救出
	朝	5	小野田さん帰還の現代的な意味〔社説〕
	朝	18	時の人鈴木さん—大手柄の冒険男
	朝	18	やはり「3月10日」—小野田家にゆかりの日
	朝	18	慣れるまで大変だ—横井さん語る
	朝	18	私は世界一の果報者—父・種次郎さんが手記
	朝	18	自宅へたたえる電話〔鈴木青年宅〕
	朝	18	厚相から感謝状
	朝	18	「金七の生活ぶりを聞きたい」—小塚さん遺族
	朝	19	「寛ちゃん、よう決断した」「本当に会える」…涙の老父母
	朝	19	「えらい息子だ」和歌山の実家、歓声の渦
	朝	19	軍刀、高々とかざす—記者会見の小野田さん
	朝	19	自作の戦闘服、ズボン
	朝	19	捜索で疲れ 姉、今は亡し
3月11日	夕	1	小野田さん 比大統領と会見—肩抱き「立派です」マ大統領
	夕	1	祖国発展に努力〔小野田元少尉の発言〕
	夕	1	「今後も体に気をつけて」—陛下がご感想
	夕	1	心尽くしの機内食も〔日航臨時便〕
	夕	1	ぐっすり眠る〔小野田元少尉の休息〕
	夕	1	比国への感謝の方法を検討〔二階堂進官房長官談〕
	夕	1	両親が今夜上京
	夕	2	残置諜者 30年の生活
	夕	4	軍人精神見抜けず—厚生省の救出活動
	夕	4	「分かりません、大和魂」〔在日外国人記者の談話〕
	夕	5	「少佐殿、小野田です！」—“救出成功”の詳報

	夕	5	住民の歓迎に初めて笑顔
	夕	5	これでやっと安心—喜ぶルバング島民
	夕	5	「小野田降伏」と大見出しで—マニラ紙
	夕	5	米紙も詳細に報道
	夕	5	孤独感なかった〔小野田元少尉記者会見〕
	夕	8	連載「孤闘30年」〔第1回〕
	夕	8	「寛郎、立派だ」—TV 中継に老父母満足
	夕	8	私の夫は帰らない—複雑…「藍より青く」の真紀さん
	夕	9	「小塚よ、さようなら」〔小野田元少尉、戦友の墓碑を訪問〕
	夕	9	「僕はメシ、お茶係り」〔鈴木青年の証言〕
	夕	9	ひっそりと小塚さん宅
	夕	9	夜は誕生パーティー〔比空軍による歓迎会〕
	夕	9	「人生の区切りがついた」〔谷口元少佐の言葉〕
	夕	9	正八位を贈る
3月12日	朝	1	小野田さん、今夕故国に—30年ぶり両親と再会へ
	朝	1	国賓なみの歓迎—マニラ 軍楽隊が「君が代」も
	朝	1	受入れ準備整う—国立東京第一病院
	朝	1	「命令」に直立不動—気迫に圧倒された 谷口さん語る
	朝	2	銃をかまえ「オイ！」—鈴木紀夫さん「出会い」を語る
	朝	4	小野田さん、国会を“占領”
	朝	18	30年の夢 きょう実る—両親喜びの上京
	朝	18	お前も一緒だったら…—小塚さんの父、墓前に報告
	朝	18	鈴木さんを緊急表彰—千葉県市原市
	朝	18	小野田さん救出速報写真展—きょうから〔銀座・松屋ほか〕
	朝	19	微笑うかべ“市民・小野田”に〔日本大使公邸での歓迎会〕
	朝	19	乾杯、ハシで刺身—柔軟な適応性 冗談も口に 歓迎会
	朝	19	黒い石の指輪
3月12日	夕	1	老父母待つ羽田へ—小野田さんマニラたつ
	夕	2	「オノダさん」に驚き、戸惑う—マニラ市民
	夕	5	消え去らぬ「敵」の観念〔なだいなだ〕
	夕	6	「やっと寛郎に会える」—老父母の会見
	夕	6	連載「孤闘30年」〔第2回〕

	夕	7	緊張羽田空港―「何も、こんな時に…」 小野田さん歓迎には全力
3月13日	朝	1	小野田さん帰る
	朝	1	30年ぶり、父母と対面―にっこり「ようがんばった」
	朝	1	戦友の話に涙浮かべ―記者会見
	朝	1	国立東京第一病院で静養
	朝	3	“すべてが任務”の30年―小野田さんの記者会見
	朝	3	感激は徐々に―父種次郎さん
	朝	3	“タテマエ”の権化―大騒ぎするのは片手落ち〔久野収〕
	朝	3	よく退屈もせず―社会復帰に細心の注意を〔望月衛〕
	朝	3	これで息子の任務も〔小塚元一等兵の父の発言〕
	朝	3	軍国主義あおる向きも―モスクワ放送
	朝	18	背後撃たれはほぼ即死―小塚さん死亡の“真相”〔小野田元少尉の証言〕
	朝	18	「ああ海南省だ」―機内でも元気で
	朝	19	「寛郎、立派でした」〔両親の発言〕
	朝	19	怒り…喜び 羽田に交錯
	朝	19	医師も驚く「健康体」〔国立東京第一病院での診察〕
	朝	19	遺影胸に、ひっそり戦友の娘〔島田元伍長の長女も羽田空港へ〕
	朝	19	ビルの林にびっくり
3月13日	夕	1	故国の朝 さわやか 小野田さん
	夕	6	連載「孤闘30年」〔第3回〕
	夕	7	小野田兄弟…女性談議も
	夕	7	首相、老父をねぎらう
	夕	7	鈴木紀夫さんに感謝状―使った費用は国が負担
	夕	7	みんなTVにクギづけ―電力消費アップ

(注) 本表は、原則として主見出し（およびカット見出し）を抽出したが、肩見出しや袖見出しを補った場合がある。なお、「余録」や「近事片々」などのコラム欄、写真・年表のキャプション、投書欄、テレビ・ラジオ欄、および広告欄は除外した。見出し欄の亀甲括弧〔 〕は筆者による補足である。

(出典)『毎日新聞』東京本社版、1974年3月（国立国会図書館所蔵縮刷版）より筆者作成。

小野田元少尉の帰国直後の各紙の見出し（および記事内容）からは、次のような特徴を見出すことができる。第一に、元少尉の動静が、日本から現地に派遣された記者によって詳細にトレースされたことである。記者たちは、「小野田さん自身のヒューマン・ストーリーや、ジャングル生活の有様、そして救出に至る裏話」

を、エピソードを交えて報じた⁶³。「救出」をめぐる微に入り細を穿つ報道は、日本国民の高い関心に応えようとするものであった⁶⁴。

第二に、小野田元少尉の語りが大量に流布された。なぜ長く投降しなかったのか、という重要な論点について、元少尉は、ルバング島と東京での二度の記者会見（前者が3月10日、後者が3月12日に実施）の席上で自らの言葉を通して説明した⁶⁵。自分は軍人として命を受けてルバング島に派遣された。上官の命令がない限り、絶対にこの島から出ることはできない（降伏しない）。自分に与えられた任務は、島での遊撃と情報収集、後方攪乱を完遂することである。あくまでも谷口元少佐による（任務解除の）命令の到達があったから投降したのだ。日本の敗戦は、元少佐から命令を受けた時に知った。29年間、嬉しかったことなど「きょうの今までありません」。29年間、終戦を知らず、軍命により任務を遂行するために島に残留したのであって、上官命令がない限り、投降などあり得なかった。このような説明が、文字情報（とテレビ映像）で報じられ、小野田元少尉の語りはやがて日本全国に広まっていく。

第三に、新聞各紙は小野田元少尉の家族、とりわけ年老いた両親（父種次郎、母タマエ）の言動や表情にフォーカスを当てた。「寛ちゃん、よう決断した」、「えらい息子だ」。新聞各紙はこのような和歌山県海南市の実家の歓声、喜びを詳報した⁶⁶。息子を待ち続けた両親の30年に及ぶ苦悩がインタビューや談話、手記⁶⁷などを通して詳しく伝えられた。『朝日新聞』は、88歳の母が「三十年間、毎日欠かさず陰膳（ぜん）を供え、あるときは断食、水ごりをとって息子の生還を祈った」姿を活写している⁶⁸。このように、新聞報道では、長い別離を経ていた分、それだけ息子と対面する両親の喜びの大きさを鮮やかに描き出す情緒的な報道が目立った。

第四に、日本政府が小野田元少尉の「救出」をいわば国家的使命と位置づけていたことも報道から浮き彫りになった。田中角栄首相は3月10日の夜、元少尉の投降を「心から喜んでいる」と述べて、その帰還を「温かくこれを迎えたい」と語り、直ちにマルコス大統領に謝電を打った。日本政府は元少尉の帰国のために特別機を手配するなど⁶⁹、その処遇は他の残留日本兵と比較しても破格であった。

第五に、フィリピン当局の協力ぶりが、報道によって定着したことも看過できない。フィリピン大統領府が空軍関係者に小野田元少尉の身柄の安全確保を指示し、またマルコス大統領が投降した元少尉をマラカニアン宮殿に招いて恩赦を与えたように、フィリピン側のこの元日本軍人への対応は異例を極めた。日本の首相や厚相、そして昭和天皇などが相次いでフィリピン当局に感謝の意を表し、それが日本で新聞報道されたことで⁷⁰、フィリピン側の貢献がより一層、際立つ形となった。

そして第六に、小野田元少尉が高く評価され、両親との再会に焦点が当てられる一方で、彼ら残留兵のネガティブな側面は問われなかった。例えば、マルコス

大統領が元少尉に与えた恩赦の対象、すなわち戦中・戦後の違法行為の具体的な内容に踏み込む報道はなく、島民被害者の声や被害状況が詳らかにされることも極めて少なかった⁷¹。

それでは、主要三紙は社説でどのような主張を展開したのだろうか。以下では、各紙の社説の論調を探ってみよう。

『朝日新聞』が掲げた社説（3月12日付）は「三十年と四時間」である。「ルバングの密林から三十年ぶりに、旧日本陸軍少尉、小野田寛郎さんがあらわれ、二十年がかりの捜索に終止符が打たれた」の文章で始まる。続いて、「これでなによりも地元の人々もホッとしたことだろう」、「[捜索に全面的に協力した] フィリピン政府当局に、心からの感謝と、深い敬意を表したい」との、フィリピン側への謝意が添えられた。その上で、社説の筆者は次のような問いを発する。東京・マニラ間は空路でわずか4時間であるのに、小野田元少尉はなぜ祖国への帰還に30年もかかったのだろうか。「『大日本帝国』の軍人としては命じられた任務を途中で放棄することはできなかった」、「密林から出てくるにはどうしても、作戦行動を停止せよとの命令書が渡されねばならなかった」。このように、小野田元少尉の説明に寄り添った上で、「大日本帝国」の軍隊の呪縛こそが、「絶望的な三十年の潜伏生活を強いた」要因だったと指摘した。同社説はまた、「人間の生命力のたくましさにいまさらながら舌をまく」と、元少尉の「生命力」に敬意を払うとともに、彼を「国民の思想、行動の自由を奪い、みずから破滅の道を歩んだ国の生んだ、犠牲者」と見た。そして、最後に、「小野田元少尉は、いつか来た道への警鐘を鳴らす使者としてうけとめられねばなるまい」と結んでいる。

他方、『読売新聞』の社説（3月11日付）は「小野田さんの無事救出に思う」である。冒頭でまず、日本政府が捜索のために政府派遣団を送り、「大規模な救出作戦」を実施したが、政府がこうした措置を講じることができたのは、「一人の生命を救い出すことに国民的な関心と支持があったからである」と指摘する。その上で、補足するかのように、「またフィリピン政府の好意も忘れてはならない」と続けた。同社説は、小野田元少尉の30年に及ぶ潜伏理由が、「軍隊における命令の重みであったとすれば、これほど残酷なことはない」としながらも、その生還を「軍人精神」の賜物と捉える見方には批判的だ。むしろ、「小野田さんを支えてきたものは、彼自身に備わった強じんな精神力」であり、「環境の変化に対応しながら」生き抜いた元少尉個人の人間性、資質こそ重視すべきだ、と論じた。そして、結論として、「戦場に眠る多くの戦没者とその家族、多くの犠牲者のことを考えても、いたずらに軍人精神を声高に語ることがあやまりであることを知らなくてはならない」、「社会の人たちが小野田さんをそっと見守る思いやりを持つことと同時に、戦争の傷跡の重みを静かに思う気持ちが必要ではないだろうか」と主張した。

『毎日新聞』の社説（3月11日付）の表題は「小野田さん帰還の現代的な意味」

である。「われわれは、小野田さんを英雄視するつもりはさらさらないが、極限の生活の中で示された立派な人生の生き方として」高く評価し、それと同時に、元少尉の帰還を戦後日本が失ったものを照らし出す鏡であると意味づけた。『残置課者』という命令で敗戦後からはじまった小野田さんのルバング島での戦争は“自分との闘い”であった。与えられた課者の任務の遂行は、事実上、不可能なことであった。それを承知しながら、あえて任務にあたった」。二人の部下を失いながらも命令を守り通した、この「任務第一」の軍人精神こそが、「小野田さんの“軍人精神”だった」と捉える。元少尉が示した「命令を忠実に守ったがんこさは、古武士の一徹さを思わせ」、不可能なことにも「自分の最善、最高の努力をつくす」その生き方（それを、ギリシャ神話の登場人物になぞらえ「シンフォシスの生き方」と表現する）、「国や社会のために、肉親の愛情に溺れることをひかえさず“さむらいの心”は、人生にとって大切なものであろう」と、元少尉の身の処し方を高く評価した。その上で、「戦後の日本人がどこかへ置き忘れたものをあらためて、いま、小野田さんが問うているとあってよい」と結論づけている。

以上のように、主要紙の社説の論調は、小野田元少尉を戦争の「英雄」と見ることに抑制的で、むしろ「犠牲者」と位置づける傾向にあった。元少尉の英雄視が戦争美化につながることへの警戒感もあったかもしれない⁷²。他方で、三紙ともフィリピンに触れてはいるものの、捜索活動に対する官民の協力など「好意的」対応への謝意が中心で、あくまでも副次的な言及に留まっていた。

(2) 「サンケイ1000人調査」

ここで、『サンケイ新聞』1974年3月14日付の4面に掲載されたアンケート調査「サンケイ1000人調査」に目を転じてみよう。各新聞社に寄せられた読者等の声（意見）が部分的に紹介されることはあったが⁷³、これだけ大規模なアンケート調査は当時なく、小野田元少尉の帰国直後の社会的な受け止めについて考える上で参考になる。ちなみに、『サンケイ新聞』は当時、毎月約296万部を発行していた⁷⁴。

「サンケイ1000人調査」は、元少尉の帰国翌日の3月13日に1000人を対象に実施されたものである。回収率は86.3%であった。紙面には、アンケートの質問項目五つが掲げられ、それぞれの回答結果を掲載している。

質問1は、「小野田さんのニュースをきいて一番強く感じたことをひとこと言いたいならわすとしたら」というものだ。回答で多かったのは、「強さ」（30%）と「りっぱ」（24%）、「喜ばしい」（19%）であった。7割以上が元少尉の帰還について、プラスの言葉を挙げて肯定的に評価していたことが分かる。逆に、「いたましさ」（15%）や「むなしさ」（6%）などネガティブな印象は少なかった。

質問2は、「小野田さんが上官の課報活動命令をいままで守っていたことについて

てどう考えるか」である。一番多かったのが、「軍人として当然であり、りっぱだ」(36%)であり、「それが任務ならしかたがない」(28%)と是認する向きも少なくなかった。両者を合わせると、30年近くも上官命令を「守っていた」ことへの肯定的評価が6割以上を占める。ただ、世代間に認識ギャップが認められることは注目される。例えば、年齢が六十代では「軍人としてりっぱ」が59%、「任務ならしかたがない」の17%を合わせると76%に上ったが、十代ではそれぞれ33%、21%の計54%に減った。「そこまでしなくてもよかった」(29%)など上官命令への服従に対する否定的な意見は十代で4割に達した(全体では3割近くあった)。

質問3は、「小野田さんや横井さんを育てた軍隊教育をどう思うか」である。この問いについては、肯定的な見方—「よい点があったと思う」(41%)、「すぐれていると思う」(8%)—と、否定的な見方—「恐ろしいことだと思う」(39%)、「感心したものではない」(9%)—が拮抗した。特に世代間で評価が分かれた。六十代で肯定的な評価68%が否定的な評価31%を上回ったのに対し、戦争を経験していない十代では肯定的な回答は37%、逆に否定的な評価は59%を超えた⁷⁵。

質問4は、「小野田さんの捜索にあたったフィリピン政府のやりかたをどう評価するか」である。この問いについては、「とてもよくやってくれたと思う」(71%)の回答が圧倒的で、「まあよくやってくれたほうだと思う」(26%)と合わせると97%となり、フィリピン政府の対応が極めて高く評価されていたことが分かる。前述のように、日本メディアが、フィリピン関係者の捜索活動への協力に加え、マルコス大統領による小野田元少尉への恩赦を詳しく報じたことも、こうした評価に作用したものと推察される。

質問5は、「小野田さんを発見した鈴木青年の行動をどうみるか」であり、「若者らしい勇気と冒険心があってよい」(49%)と「好きなことがやれてうらやましい」(34%)が多かった。

以上の「1000人調査」の結果からは、日本国民の多くが小野田元少尉の帰還を歓迎し、肯定的に評価していたことが分かる。逆に、元少尉に対する批判や否定的な言説は少なかった。こうした傾向は、先に見た主要紙の報道や論調とも重なっており、元少尉のルバング島「占領」の客体(現地島民)については、質問項目自体を含めて、あまり重要視されていなかったことが窺える。

(3) 地方紙の投書欄から

社説が新聞社の主張や公式見解だとすれば、投書には読者個人の思いが比較的良好に表われている。ここでは、一例として広島的主要紙『中国新聞』(本社は広島市、当時の月間発行部数は約54万4000部⁷⁶)に掲載された投書を取り上げてみよう。ちなみに、同紙の社説「小野田さん救出の意味」(1974年3月12日付)は、「言うまでもなく、小野田さんは戦争の大きな犠牲者である」とした上で、「われ

われは小野田さんの救出を率直に喜ぶとともに、戦争の惨禍を改めて思い起こして二度とこのようなことを繰り返さないよう固く誓うべきだ」と、元少尉の経験を反戦の糧にすべきだと訴えた。

『中国新聞』の投書は朝刊5面の「広場」欄に掲載されている。小野田元少尉の帰国当日（3月12日）から報道熱が落ち着く同月21日までの10日分を例にとると、当該期に掲載された投書は20点を数え、その内容は大きく五つに分けることができる。

第一に指摘できるのは、小野田元少尉に対する尊敬の念である。例えば、18歳の男性は、元少尉の「強い意志と精神力に感心せずにはられません」とし、ルバング島に留まり、戦い続けた理由について、「島から出ようと思えば、いつでも出られたでしょうが、上官の命令とそれにも増して愛国心がそうさせたのだと思います」と推測、「彼は日本人の誇りです」と書いた（3月21日付）。

第二に、元少尉を戦争の「犠牲者」と見る人も多かった。47歳の女性は、「小野田さんの青春を無残に空費させた戦争、厳しい軍人精神は、当時を振り返ってズツとします」と記し（3月18日付）、33歳の女性は、「小野田さんは、間違っただけに向かって間違っただけの教育を徹底させていた日本の教育の犠牲者」と捉えている（3月14日付）。

第三に、「忠節」や「質素」など元少尉のふるまいから人々が看取した価値観が、戦後の日本で失われてしまったとして、元少尉を「戦後」批判の参照軸にする者もいた。51歳の男性は、「極限を生き抜き、三十年間戦う姿勢を崩さなかった男、そこには忠節、礼儀、信義、質素といった旧帝国陸軍の背骨が凝縮している。戦後三十年近く日本人が失っていたものを小野田さんは満身にあふれさせているのではないか。われわれが失い小野田さんが持っているものを取り戻す必要がある」と主張し（3月12日付）、また18歳の男性は、「今の日本は墮落しきっています」、日本は経済的に豊かになったが、「日本人の心というものは全く汚れてしまっています」、「日本人は今こそ古来の純粋な精神を取り戻すべきではないでしょうか」と論じている（3月21日付）。

第四に、小野田元少尉の「発見者」である鈴木青年の功績をもっと称えるべきだ、との意見もある。60歳の女性は、鈴木青年がもし小野田元少尉との会話の中で、「誤解を招くような軽率なことを一口でももらしていたら、小野田さんは再び日本の土を踏む決心をしなかったかもしれない」と見る。そして、「現代の好青年鈴木さんの命をかけた行為に心から拍手を贈るとともに、国も鈴木さんの功績に対し感謝状を贈るべきだ」と主張した（3月19日付）。さらに、60歳の男性は「自費で命をかけて救出の機会をつくった青年、鈴木さんの地道な功績を厚生省や有識者は見直して欲しい」と述べ（3月14日付）、80歳の女性もこの投書を「溜飲が下がる思いで」読んで、青年に賛辞を呈した（3月17日付）。

第五に、投書にはフィリピンへの言及もあった。搜索活動について、フィリピ

ンの「官民一致の積極的な協力を得たことに頭の下がる思い」を抱いて感謝し（65歳男性の投書、3月20日付）、特にマルコス大統領が小野田元少尉に恩赦を与え、戦中・戦後の違法行為に報復せず、「寛大」な温情を示したことへの謝意が表明された（同前、および60歳男性の投書、3月14日付、60歳男性の投書、同月21日付）。読者の中には、「小野田さんも生きんがため身の危険があったでしょうが、半面、島民は三十年もの長期間、不安とおののきに襲われていたと思います」と、ルバング島民にまなごしを向ける読者がいないわけではない（65歳男性の投書、3月20日付）。だが、このような島民への言及は極めて少なく、投書の多くは前述の主要紙の論調と同様、概して小野田元少尉に敬意を払い、彼を賞賛し、いたわるといふ、日本人本位の傾向が強いものであった。

おわりに

本稿では、小野田帰還前後の新聞論調について検討を加えてきた。分析の結果、以下のような報道傾向を読み取ることができた。第一に、報道の中心を占めたのは、戦後約30年間、ジャングルに潜伏した末に生還した小野田元少尉に対する驚きと敬意、そして長年の苦労へのねぎらいであった。元少尉を戦争や軍隊、当時の軍事教育の「犠牲者」と見る向きも多かった⁷⁷。

第二に、日本人記者の主たる関心は、小野田元少尉の投降と帰国前後の動静、そして老齢の両親の表情に注がれた。報道の視角は日本人中心にあり、記事内容には均質性が認められた⁷⁸。さらに、二度にわたる記者会見は、元少尉自身による説明ゆえ、彼の見方を全国的に流布する機会となった。それは、自分は30年近く終戦を信じ切れず、ただ命令に従って（情報収集などの）任務を遂行し続けたのであり、上官命令がなければ決して投降できなかつた、というものだ。帰還前後の新聞記事は、こうしたロジックで描かれる傾向が支配的で、報道の最優先順位は小野田元少尉その人に据えられていた。

第三に、日本のメディアはまた、捜索から投降、帰国までのプロセスにおける日比両政府による異例の対応（一人の敗残兵に対する前例なき厚遇⁷⁹）、そして両者の協力と連携に強く光を当てた。残留兵という戦争の残滓を扱う案件にもかかわらず、かかる協力関係を通して、日比友好のイメージが強く印象づけられた。田中首相は、1974年4月1日に首相官邸で面会した小野田元少尉に対して、「これで日比関係もうんと友好促進になりますよ」と話したが⁸⁰、彼もまた、元少尉の帰還を日比友好と結びつけて捉えた一人であった。

第四に、小野田元少尉と両親中心の物語、そして日比友好イメージが日本社会に浸透していく中で、元少尉に対する正面切った批判は封印された⁸¹。もとより、元少尉ら残留兵がルバング島民に与えた影響についてもほとんど語られなかつた。

元少尉に焦点を当てた一連の報道は、確かに日本国民の関心に沿うもので⁸²、それ自体、ルバング島における残留兵問題の一面を示すものであったろう。けれども、そのことは同時に、残留兵のダークサイド、例えば住民殺傷や農作物など私有財産の略奪、家屋の放火といった彼らの加害の側面を覆い隠す結果を招いた。ルバング島での記者会見の時、フィリピン人記者による島民被害に関する質問が日本側通訳によってさえぎられたという⁸³。こうしたエピソードからは、元少尉への批判や暗部の直視をできるだけ回避したい、日本人関係者の胸の内が見えて見える⁸⁴。「小野田さんも戦争の犠牲者ですが、ルバング島の人たちも肉親を殺されたり、物をとられたりしているわけです。そういうことに対するマスコミの取り上げ方がすくないですね⁸⁵」。作家・陳舜臣のこの発言は、当時の日本人の語りの状況をよく言い当てていよう⁸⁶。

こうした小野田報道をめぐる不均衡な構図（日本人中心の見方）をもたらす背景に何があったのだろうか。まず指摘すべきは日本人の戦争観との関係である。戦争中、一般の日本国民は空襲を受け、食糧難や疎開を強いられた悲哀を味わっており、戦地に送られた日本軍兵士も多くが戦（病）死や戦傷するなど苛烈で悲惨な体験をしていた。それゆえ、日本人の戦争の見方は、いきおい被害者体験に寄りかかりがちであった⁸⁷。小野田元少尉をめぐる日本メディアの見方も、元少尉は「戦時の国家機構の被害者だった」というものが多く⁸⁸、取材陣も彼の「救出」報道に全力を注いだ。そのため、ルバング島民の視点は後景に退いてしまった⁸⁹。加えて、日本人記者が島民に対して、やや敬意を欠いたことも⁹⁰、このような優先順位に作用したかもしれない。

他方で、日本政府が小野田元少尉の「救出」を国家的な施策と位置づけ、またフィリピン政府・軍当局が捜索に全面的に協力し、元少尉を「英雄」として遇したことも見逃すことができない。特に、マルコス大統領が元少尉を大統領府に招待し、過去の違法行為に恩赦を与えて刑事責任を不問に付し、加害問題を棚上げにしたことで、ルバング島民（特に被害者）は沈黙を強いられ⁹¹、彼らの声も日本に届きにくかった⁹²。マルコス大統領による小野田元少尉の厚遇は、同政権が当時推進していた対日友好政策の一環でもあった⁹³。日本政府とメディアの姿勢に加え、こうしたフィリピン側の事情もまた、小野田中心の物語を下支えたものと考えられる。

さて、小野田元少尉が投降し、日本に帰還してから、早くも半世紀近い時が流れた。元少尉の存在は今も日本国民の関心を誘う⁹⁴。2014年1月16日に元少尉が死去した時、日本の新聞各紙やテレビはその訃報を速報した。終戦を信じず、作戦解除命令がなかったためジャングルに潜伏し、1974年3月に元上官の命令を受けて帰国した⁹⁵。訃報欄に添えられたこうした「評伝」類の多くは、元少尉に即した文脈で描き出すなど、彼の帰還前後の報道が示したフレームが踏襲された。

元少尉が長年潜んだルバング島の島民は基本的に視野の外に置かれ、島民被害に対する日本側の公的認知もないまま今日に至っている。このような「他者」不在の残留日本兵のイメージは、彼我の「戦争」認識のギャップを埋めるには半世紀という歳月はなお不十分で、歴史像の問い直しに向けた、たゆまぬ努力が必要であることを我々に示唆している。

注

¹ 『読売新聞』1974年3月13日付。以下、主要紙については東京本社版（国立国会図書館所蔵の縮刷版）を参照した。

² 『朝日新聞』1974年3月13日付。

³ 『朝日新聞』1974年3月12日、12日付夕刊。

⁴ 引田惣彌『全記録テレビ視聴率50年戦争—そのとき一億人が感動した』（講談社、2004年）231頁。

⁵ 「果てしなき小野田ショックを語る各界100人」（『週刊文春』1974年4月8日号）26-32頁。1974年の出来事について、『読売新聞』の「読者が選んだ日本10大ニュース」の第2位に「小野田元少尉の救出」が選ばれたことから、その関心の高さが窺える（『視聴率30年』ビデオ・リサーチ、1993年、92頁）。

⁶ 残留日本兵の定義について、本稿では、第二次世界大戦で日本が侵攻、占領したアジア・太平洋戦域で、終戦後、他の日本軍将兵等が引き揚げ、復員していく中、投降を拒むなどして日本に帰国せず、そのまま現地（外地）に残留し、その後、祖国に帰還するか、現地に留まった日本兵等（植民地出身者を含む）、とする。残留日本兵は、フランス領インドシナ（現在のベトナム、ラオス、カンボジア）やオランダ領東インド諸島（現インドネシア）をはじめ、タイ、ビルマ（現ミャンマー）、中国、マラヤ（現マレーシア、シンガポール）、フィリピン、ソ連（現ロシア）、モンゴルなどアジア各地に存在し、その総数は1万人に及ぶという（林英一『残留日本兵—アジアに生きた一万人の戦後』中公新書、2012年、i-vii、32-37頁）。

⁷ 情文局報道課「小野田元少尉に関する海外論調」1974年4月5日（外務省アジア局南東アジア第二課長『邦人援護事務 フィリピン・ルバング島元日本兵関係』[情報公開法による外務省開示文書、以下、情報公開文書と略記]所収）。このほか、「小野田さん救出 各国の反響」（『サンケイ新聞』1974年3月11日付）、「各国にも大きな反響」（『朝日新聞』1974年3月11日付夕刊）、「小野田さん生還 英紙、一斉に報道」（『読売新聞』1974年3月11日付夕刊）も参照。

⁸ 当時、新聞はテレビと並んで日本国民の主な情報源として、重要なメディア媒体であった（NHK放送世論調査所「2月国民世論調査『日本人とテレビ文化』」1975年2月調査、内閣総理大臣官房広報室編『全国世論調査の現況 昭和50年版（昭和49年4月～昭和50年3月）』大蔵省印刷局、1976年、506-507頁）。

⁹ 本稿は、永井均「日本人は小野田元少尉をどう見たか—フィリピンの残留日本兵をめぐる語り」（『平和への扉を開く』広島市立大学広島平和研究所、2019年3月）を基に、新たな資料と知見、注を加えるなどして大幅に改稿し、発展させたものである。なお、優れた先行研究である Beatrice Trefalt, *Japanese Army Stragglers and Memories of the War in Japan, 1950-1975* (London and New York: Routledge Curzon, 2003), および五十嵐惠邦『敗戦と戦後のあいだで—遅れて帰りし者たち』（筑摩選書、2012年）からは多くを学び、その分析から示唆を得た。

- ¹⁰ 以下、小野田元少尉の経歴と動向については、主に厚生省援護局『ルバング島から復員した元陸軍少尉小野田寛郎に関する記録』（未公刊、1974年、アジア経済研究所図書館所蔵）、小野田寛郎『わがルバン島の30年戦争』（講談社、1974年）に拠った。
- ¹¹ 俣一戦史刊行委員会編『俣一戦史—陸軍中野学校二俣分校第一期生の記録』（俣一会、1981年）19、22頁。畠山清行『秘録陸軍中野学校』（新潮文庫、2003年）202-205頁も参照。
- ¹² 小野田寛郎「命令の中身」（『週刊現代』1974年5月23日号）23頁、前掲、小野田『わがルバン島の30年戦争』44頁。
- ¹³ 前掲『ルバング島から復員した元陸軍少尉小野田寛郎に関する記録』。
- ¹⁴ 同前。
- ¹⁵ 同前。
- ¹⁶ *Daily Mirror*, 12 May, 18 June 1954; *The Manila Times*, 27 May 1954; 同前『ルバング島から復員した元陸軍少尉小野田寛郎に関する記録』。
- ¹⁷ 『朝日新聞』1959年1月31日付夕刊、2月4日付。
- ¹⁸ 同前、1959年2月27日付、5月11日付、10月20日付夕刊。
- ¹⁹ 前掲『ルバング島から復員した元陸軍少尉小野田寛郎に関する記録』。
- ²⁰ 『朝日新聞』1959年12月12日付、『読売新聞』1959年12月12日付夕刊。
- ²¹ *The Manila Times*, 8 December 1959; *Daily Mirror*, 11 December 1959, 12 February 1960; 『朝日新聞』1960年2月12日付。
- ²² 前掲『ルバング島から復員した元陸軍少尉小野田寛郎に関する記録』。
- ²³ 卜部敏男在フィリピン日本国大使より大平正芳外務大臣宛電報「ルバング島の旧日本兵」1972年10月22日（情報公開文書『邦人援護事務 フィリピン・ルバング島元日本兵関係』所収）、『朝日新聞』、『読売新聞』1972年10月22日付。
- ²⁴ 小野田寛郎『生きる』（PHP 研究所、2013年）110-111頁、津田信『幻想の英雄—小野田少尉との三カ月』（図書出版社、1977年）62-63、80-83、171頁。
- ²⁵ 前掲『ルバング島から復員した元陸軍少尉小野田寛郎に関する記録』、前掲、小野田『わがルバン島の30年戦争』191-196頁、若一光司『最後の戦死者 陸軍一等兵・小塚金七』（河出書房新社、1986年）167-181頁。
- ²⁶ 小塚金七追悼委員会編『声はとどいていたのに—追悼ルバング島の小塚金七君』（私家版、1973年）16-23頁。
- ²⁷ *Philippines Daily Express*, 26 October, 4 November 1972. 永井均「フィリピンから見た残留日本兵問題—ルバング島での捜索活動を中心に」（『HIROSHIMA RESEARCH NEWS』2019年10月号）も併せて参照。
- ²⁸ 卜部大使より大平外務大臣宛電報「ルバング島の旧日本兵」1972年10月26日（情報公開文書『邦人援護事務 フィリピン・ルバング島元日本兵関係』所収）。
- ²⁹ 『朝日新聞』、『読売新聞』、『毎日新聞』1972年10月20日付夕刊。
- ³⁰ 『朝日新聞』、『読売新聞』1972年10月22日付。Also see *Times Journal*, 23 October 1972.
- ³¹ 小野田「救出」については、一連の新聞報道のほか、国会審議の場でも話題となった。例えば、政府を代表して、厚生政務次官（増岡博之）は、「小野田元少尉を無事救出することは国民すべての強い念願であり、厚生省に与えられた使命と考えておりますので、今後あらゆる手段を尽くして救出の努力を傾ける所存であります」と述べ（1972年10月27日）、また外務政務次官（青木正久）は、「いま政府としてはあくまでもさがし出すまで捜索を続ける、そのためにいかなる費用がかかろうとも、これは国民の皆さんも納得していただけると確信をいたしております」と答弁している（同年11月8日）。「第七十回国会衆議院社会労働委員会議録 第一号」（1972年10月27日）2頁、「第七十回国会衆議院法務委員会議録 第二号」（1972年11月8日）8頁、参照。なお、国会の議事録は「国会会議録検索システム (<http://>

kokkai.ndl.go.jp/) から情報を得た。

³² 前掲、若一『最後の戦死者』183頁。

³³ 筆者によるペドロ・ワッチョン氏へのインタビュー、2017年1月9日、2月23日、マニラ首都圏ケソン市にて。

³⁴ 筆者によるワッチョン氏へのインタビュー、2017年3月2日、2018年8月30日、マニラ首都圏ケソン市にて。村田博『『オノダ騒動』の後遺症は残った』（『週刊サンケイ』1974年4月12日号、30-31頁）も併せて参照。

³⁵ 『朝日新聞』1973年4月14日付。

³⁶ 同前。

³⁷ 前掲『ルバン島から復員した元陸軍少尉小野田寛郎に関する記録』、前掲、小野田『わがルバン島の30年戦争』207頁。

³⁸ 戸井十月『小野田寛郎の終わらない戦い』（新潮社、2005年）96-97頁、『毎日新聞』1974年3月11日付夕刊。

³⁹ 前掲、小野田『わがルバン島の30年戦争』196-198頁、小野田寛郎『わが回想のルバン島—情報将校の遅すぎた帰還』（朝日新聞社、1988年）179頁、同前、戸井『小野田寛郎の終わらない戦い』91頁。

⁴⁰ 「20世紀の証言 小野田寛郎」（『This is 読売』1997年7月号）126-127頁。

⁴¹ 前掲『ルバン島から復員した元陸軍少尉小野田寛郎に関する記録』、前掲、小野田『わがルバン島の30年戦争』213-214頁、前掲、戸井『小野田寛郎の終わらない戦い』98-99頁、小野田寛郎『たった一人の30年戦争』（東京新聞出版局、1995年）180-182頁。

⁴² 同前、小野田『わがルバン島の30年戦争』219頁、前掲、小野田『わが回想のルバン島』183頁、同前、小野田『たった一人の30年戦争』184頁。

⁴³ 卜部大使より高島益郎アジア局長宛半公信「小野田少尉の帰還」1974年3月19日（情報公開文書『邦人援護事務 フィリピン・ルバン島元日本兵関係』所収）。

⁴⁴ 「鈴木紀夫さんの大冒険を大森実が三時間徹底的に『直撃』インタビュー」（『週刊現代』1974年3月28日号）27-28頁。

⁴⁵ 撮影を許した理由について、小野田元少尉は「こいつは確かに日本人だが、まだ正体が判らない。写真を撮らせてやれば、やがてそれが何らかの反応になって現われるだろう。私にとっては一種の賭けであった」と説明している（前掲、小野田『わがルバン島の30年戦争』223-224頁）。

⁴⁶ 鈴木紀夫『大放浪—小野田少尉発見の旅』（文藝春秋、1974年）195-231頁。

⁴⁷ 卜部大使より大平外務大臣宛電報「ルバン島の旧日本兵」1974年2月23日、2月26日、2月28日（情報公開文書『邦人援護事務 フィリピン・ルバン島元日本兵関係』所収）。

⁴⁸ *Pacific Stars & Stripes*, 3 March 1974.

⁴⁹ 前掲、小野田『わがルバン島の30年戦争』242頁、前掲、小野田『わが回想のルバン島』195頁。

⁵⁰ 卜部大使より大平外務大臣宛公信「小野田元少尉救出作業（報告）」1974年3月15日（情報公開文書『邦人援護事務 フィリピン・ルバン島元日本兵関係』所収）。

⁵¹ 同前、および前掲、卜部大使より高島アジア局長宛半公信「小野田少尉の帰還」。前掲、小野田『わが回想のルバン島』193-197頁も併せて参照。

⁵² *Philippines Daily Express*, 12 March 1974; 『読売新聞』、『毎日新聞』1974年3月11日付夕刊。

⁵³ *The Times Journal*, 12 March 1974; "Official Week in Review" (*Republic of the Philippines, Official Gazette*, March 1974), lxxxi.

⁵⁴ 『朝日新聞』1974年3月12日付夕刊。

⁵⁵ 沼館義明「ルバン島捜索隊記者の感想—ジャングルのなかの二つの顔」（『時事解説』1974

年3月23日号) 13頁。

⁵⁶ Trefalt, *op. cit.*, 157. 新聞各紙が、鈴木青年撮影の写真を添えて小野田元少尉の生存を号外で報じたのも首肯できよう(『朝日新聞』1974年3月10日付号外、『中日新聞』1974年3月11日付号外、羽鳥知之監修『「号外」戦後史 1945-1995年』第2巻、大空社、1995年、76-79頁)。

⁵⁷ 『『小野田帰還』を冷静にみる』(『週刊読売』1974年3月30日号) 38-41頁。

⁵⁸ 例えば、『小野田さんは生きていた—ルバング島』(『アサヒグラフ』1974年3月15日号)、『(緊急特集) 小野田元少尉 ルバング島の30年』(『週刊朝日』1974年3月25日号)、『(緊急大特集) 小野田元少尉その全集録』(『週刊読売』1974年3月30日号)、『(緊急増刊) 最後の日本軍人 小野田少尉の全記録』(『週刊サンケイ』1974年4月3日号)、『(緊急増刊) 小野田さん帰る 全記録 ルバングから祖国へ』(『毎日グラフ』1974年4月5日号) などがある。

⁵⁹ 『朝日新聞』1974年3月11日、14日付夕刊、『毎日新聞』3月12日付、『中国新聞』3月14日付、15日付、同日付夕刊などを参照。

⁶⁰ 哲学者で評論家の久野収のコメント(「現代日本にとびこんできた“30年前”」『サンデー毎日』1974年3月31日号、24頁)。

⁶¹ 新聞各紙はまた、「孤闘30年」(『毎日新聞』1974年3月11日付夕刊より11回連載)や「若者と戦士」(『サンケイ新聞』3月11日付夕刊より6回連載)、「小野田陸軍少尉—凍結された30年」(『朝日新聞』3月12日付より5回連載)などの特集記事を企画・連載している。

⁶² 数字は1973年11月の月間平均部数による(日本新聞協会編『日本新聞年鑑 昭和49年版』電通、1974年、118、143、152頁)。

⁶³ 内田忠男「全報告! 小野田さん救出報道の内側」(『人と日本』1974年5月号) 242頁。

⁶⁴ 同前、246頁。

⁶⁵ 『朝日新聞』、『読売新聞』、『毎日新聞』1974年3月11日付夕刊、および3月13日付。

⁶⁶ 『毎日新聞』1974年3月11日付。

⁶⁷ 新聞に掲載された父種次郎の手記の一例として、「衆生の恩ひしひし」(『朝日新聞』1974年3月11日付)、「全国の皆様ありがとうございますございました」(『読売新聞』3月11日付)、「私は世界一の果報者」(『毎日新聞』3月11日付)がある。

⁶⁸ 『朝日新聞』1974年3月11日付。

⁶⁹ 『朝日新聞』、『毎日新聞』、『サンケイ新聞』1974年3月11日付。

⁷⁰ 『朝日新聞』、『毎日新聞』1974年3月11日付、および同日付夕刊。小野田元少尉の帰還をめぐる昭和天皇の関心と発言については、宮内庁『昭和天皇実録』第16(東京書籍、2018年) 27頁、参照。

⁷¹ 1962年1月に狙撃されて重傷を負った被害者や、72年5月に夫を射殺された妻に取材した記事として、『サンケイ新聞』1974年3月13日付夕刊がある。その約2週間後、同じ遺族(前述の未亡人)に取材し、その怒りを伝えるインタビュー記事が掲載されたが(『読売新聞』1974年3月29日付)、このような被害者への取材記事は当時、例外的であった。他方で、小野田投降直後、安堵する島民(匿名)の感想を報じる記事は若干あった(『朝日新聞』、『読売新聞』1974年3月11日付、『毎日新聞』3月11日付夕刊)。

⁷² Trefalt, *op. cit.*, 154-155.

⁷³ 投書欄のほか、「戦争は二度とごめん」(『朝日新聞』1974年3月12日付)も参照。

⁷⁴ 前掲『日本新聞年鑑 昭和49年版』126頁。

⁷⁵ 若者世代の見方の一端については、「リップバ かawaiiそう 密林の方がマシ?—ヤングの反応」(『読売新聞』1974年3月11日付)参照。

⁷⁶ 前掲『日本新聞年鑑 昭和49年版』239頁。

⁷⁷ Trefalt, *op. cit.*, 159.

⁷⁸ 報道陣が現地に殺到した小塚事件直後の状況と違い、鈴木青年が元少尉と接触した1974年2月下旬以降、フィリピン空軍当局は（前述のように）島民以外のルバング島への立ち入りを厳禁した。かかる渡航規制のため、日本人記者団はマニラで足止めを余儀なくされた。当時、彼らの主たる情報収集の機会は、日本大使館（あるいは政府派遣団）が定期的に開くブリーフィングだけだった。3月10日に元少尉が投降したことを受けて渡航規制が解除されると、100名近い報道陣がルバング島に押し寄せた。以上のようなメディアを取り巻く環境も、報道内容の均質化の要因になったと考えられる（「小野田さん捜索活動を追って 現地記者座談会」『朝日新聞』1974年3月11日付、前掲、内田「全報告！小野田さん救出報道の内側」244頁、西島雄造「小野田さん救出作戦」2003年4月、山下幸秀「小野田さん」2006年11月、日本記者クラブ「取材ノート」<https://www.jnpc.or.jp/journal/interview/series> 2020年2月10日最終アクセス）。

⁷⁹ 清水馨八郎「小野田さん救出は世紀の大演出」（『人と日本』1974年6月号）82頁。小野田捜索に日本政府が約1億円の国家予算を投入したことからも、その異例の対応ぶりが窺える（『読売新聞』1974年3月11日付夕刊、『朝日新聞』3月13日付）。

⁸⁰ NHK・ETV特集「小野田元少尉の帰還—極秘文書が語る日比外交」2017年3月4日放映。
⁸¹ 小野田帰還から1カ月もすると、元少尉に対する批判記事が雑誌等で散見されるようになる。例えば、「小野田寛郎元少尉の英雄部分を全否定する」など、『週刊ポスト』が長期にわたって展開した「“英雄・小野田”徹底批判」の連載記事（1974年5月10日号～7月12日号）や、1977年出版の前掲、津田『幻想の英雄』を参照。

⁸² 「小野田報道への疑問」（『文藝春秋』1974年5月号）126頁。

⁸³ 新村正史「デスク MEMO」（『潮』1974年5月号）83-84頁。

⁸⁴ 前掲、五十嵐『敗戦と戦後のあいだで』214、228頁も参照。

⁸⁵ 前掲『週刊文春』1974年4月8日号、31頁。

⁸⁶ 日本に比較的に長く滞在し、報道に携わってきた外国人記者も、同様の違和感を抱いた（「青い目が見た『サムライ・オノダ』」『週刊サンケイ』1974年4月5日号、33頁）。

⁸⁷ 当時、「先の大戦」をめぐる日本国民の主な関心は、原爆被災や空襲、疎開、食糧難や物資不足など、彼ら（やその家族）が経験した苦労に向けられた（NHK放送世論調査所「11月国民世論調査『昭和50年・回顧と評価』」1975年11月調査、内閣総理大臣官房広報室編『昭和51年版 世論調査年鑑—全国世論調査の現況』大蔵省印刷局、1977年、529-530頁）。吉田裕『日本人の戦争観—戦後史のなかの変容』（岩波書店、1995年）137、197-199、234頁。なお、戦場において日本軍将兵が置かれた環境については、吉田裕『日本軍兵士—アジア・太平洋戦争の現実』（中公新書、2017年）に詳しい。

⁸⁸ 前掲、五十嵐『敗戦と戦後のあいだで』240頁。

⁸⁹ Trefalt, *op. cit.*, 154-155, 159.

⁹⁰ 「“幻の小野田”を追ったルバング島 てんやわんやの報道合戦」（『アサヒ芸能』1972年12月14日号）124-127頁。

⁹¹ このようなマルコス大統領による島民被害の政治的処理は、ルバング島民の個人補償の道を狭めた。島民被害に対する補償問題については、小野田元少尉の帰還直後に日比両政府の間での重要案件になっていた。当初、日本政府はフィリピン政府に「見舞金」100万ドル（3億円）を贈与する計画であったが、マルコス大統領が固辞したため、結局、比日友好協会に「基金」として贈られた。島民個人への補償はなかった（前掲、NHK・ETV特集「小野田元少尉の帰還」参照）。「見舞金」問題をはじめ、ルバング島の残留日本兵をめぐるフィリピン政府の対応については、別稿を期したい。

⁹² 島民被害者に対して、体系的にインタビュー取材を試みた労作、藤波修「ルバング島の遺族」（『諸君！』1977年9月号）が発表されたのは、元少尉の帰還から約3年後のことであっ

た。その35年後、2012年（元少尉死去の2年前）には、ロオック町ブロール村での取材記事（森史朗「小野田少尉 ルバング島の『タブー』」『文藝春秋』2012年9月号）が発表されている。

⁹³ 前掲、五十嵐『敗戦と戦後のあいだで』212-213頁。

⁹⁴ 小野田元少尉の死後、テレビで関連番組がいくつか制作・放映された（管見の限り、2016年4月から2020年3月までの間に少なくとも10本の番組が制作されている）。近年の関連論考として、斎藤充功『小野田寛郎は29年間、ルバング島で何をしてきたのか』（学研パブリッシング、2015年）、林英一「小野田寛郎と横井庄一—豊かな社会に出現した日本兵」（杉田敦編『ひとびとの精神史』第6巻、岩波書店、2016年）がある。

⁹⁵ 『朝日新聞』2014年1月17日付夕刊、18日付、『日本経済新聞』1月17日付夕刊、『産経新聞』1月18日付。